

優秀賞

生と死に直面して

宮城県 仙台市立七郷中学校 三学年

間宮 遼佳

母に抱かれた生まれだての私が初めて触れた外の風景は、真っ白い羽毛のよ
うな雪が空から舞い降りてくる様子だったそうです。十一月。産後の母が退院
した日に、その年の初雪が降ったこと。白く染まった地面に一步踏み出した父
と母が、「命」の温かさ、愛おしさを実感したことを、私はこれまで何度も両
親から聞かされてきました。「この子のことをずっと守っていこう」と二人は
約束したそうです。その日からずっと両親の愛に包まれて生きてきた私が、「死」
の恐ろしさを初めて実感したのは、中学一年生の夏のことでした。

部活動の練習を終えて帰宅した家には、珍しく灯りがついていませんでした。
家の中はしんと静まりかえり、薄暗いリビングの机の上には手紙が置いてあり
ました。「お母さんが交通事故にあいました。病院に行ってください。」

丁寧な字で書かれた祖母の手紙を手に、誰もいない部屋で、私の頭の中は恐怖
と不安だけが渦巻いていました。父からの電話が入るまでどれくらい時間が
あったのか、何をしていたのかはあまり記憶にありません。暗闇の中で電話が
鳴り響き、とびついた受話器の向こうから、父が母に電話を渡す声が聞こえま
した。「心配かけてごめんね。大丈夫だから。」と弱々しく繰り返す母の声。涙
が後から後から溢れて止まりませんでした。『本当に大丈夫なのか』という心
配と、『生きていてよかった』という安堵。そして、そんなに大変なときでも
私のことを気にかけてくれている母の思いに心が震えました。

それから母の入院は長く続き、家事をする時間も増えましたが、母が生きて
くれているという喜びを思えば、辛いことは何もありませんでした。ただ、そ
んな日々の中で、今まで考えなかったようなことを繰り返し考えるようになり
ました。

それは、幸せな日常がいつも死と隣り合っているという当たり前の事実でし
た。祖父、祖母、父、母、弟……。大好きな家族が、もしいなくなったら
……？この大切な家族の誰一人として明日必ず会える保証なんてないのです。
悲しく、恐ろしい想像を何度となく繰り返して不安がる私に、父と母は静かに
思いもよらない話をしてくれました。それは「もしも」のときの話でした。

「もしも」自分たちに何かあったら、それが子供たちを悲しませることだけ
でなく、生活の支えがなくなるということ。私が生まれた日に両親が誓い合っ
た「この子のことをずっと守る」という思いを遂げられなくなるということ。

第55回中学生作文コンクール

だからそうならないように準備をしているという話でした。「生命保険」の話です。誰かが亡くなったり、病気になったりするかもしれないということは、誰も考えたくないことです。しかし、毎日のようにテレビで取り上げられる死亡やケガ、病気などのニュースは、いつでも誰にでも起こり得ることなのです。自分が死ぬこと以上に、子供たちを残していくことに恐ろしさを感じるという両親の言葉にまた涙が出ました。家族のことを考えて、よく選んで、たくさんのお金をかけて入ってくれている「生命保険」は、両親の私たちへの愛情であることがよく分かりました。

先日、キャリア教育の体験プラザで、生活にかかるお金のシミュレーションをしたのですが、「生命保険料」が大きな支出になっていることが話題に上がりました。以前の私ならもったいないと思ったかもしれないが、今の私は、それが家族への愛情の証であることを知っています。こうして私が安心して生活できるのは、「もしも」に備えてくれている両親のおかげです。

将来、私に新しい家族が増えて「この子をずっと守っていこう」と誓う日が来たとき、きっと私は、改めて「生命保険」のことを考えるとと思います。大切な人が増えるたびに強く、その必要性を思うはずです。